

第2のヤリタナゴ生息地をつくる

ヤリタナゴ調査会 齊藤裕也

ヤリタナゴはマツカサガイ(二枚貝)の鰓内に産卵し、ここで卵は受精、発生から孵化、そして短期間の生育をした後に、貝の出水管より稚魚が泳ぎ出してくるので、マツカサガイはヤリタナゴの産卵母貝と呼ばれる。ヤリタナゴはマツカサガイが生息していなければ繁殖できない魚である。藤岡市内には1水系の3ヵ所にマツカサガイの生息地があり、それが群馬県内の本種の生息地の全てである。また、この水系の最も下流に位置する下戸塚地区はヤリタナゴの県内唯一の生息地である。ヤリタナゴはマツカサガイとともに群馬県のレッドデータブック(2012)で最も絶滅の危険性が高い「絶滅危惧 A 類」のカテゴリ-に評価される貴重種である。

最近、下戸塚地区ではマツカサガイの殻が多く発見され、2010年から、2014年までの5年間で600個体以上のマツカサガイが死亡(殻の発見)し、生きた個体の発見は年々少なくなり、少数しかみつからない事から、現在のマツカサガイの生息個体数は、かなり低い水準にあると推定される。また、ヤリタナゴも産卵母貝の個体数が少ないことに加えて、生息に重要な良好な越冬場所が2010年に3面コンクリ-ト化されて失われたことにより、一時は2000個体以上確認されていたヤリタナゴが、その後は400個体以下で推移するようになった(図3)。さらに、下戸塚地区の生息地は本年から5年間にわたって圃場整備事業が行われる予定であり、工事に伴って水路の改変や水廻しなどの土木工事が少なからず行われ、工事後も環境が安定するまでの期間は、この生息地でのヤリタナゴとマツカサガイの生存について、不測の事態も考慮に入れておかななくてはならない状況となっている。



図1 ヤリタナゴの雌雄



図2 マツカサガイ

一方、この生息地より上流に位置するH地区には小規模ながらマツカサガイが健全に生息する水路がある。しかし、ここの貝を産卵母貝として要注外来生物の中国原産のタイリクバラタナゴ(略してタイバラ)が繁殖している。この地区のタイバラの個体数については増加の傾向があきらかで、2012年には2250個体が確認され、増えたタイバラの流下ができることが懸念された(図4)。H地区のタイバラを駆除した後にヤリタナゴを放して、ここを第2のヤリタナゴ生息地とする計画を2013年春より始めた。計画は両種ともに春(5~6月頃)が繁殖期なので、その前の4月中にタイバラを駆除し、5月にヤリタナゴを放して繁殖させ、秋に個体数を確認することとした。

2013年4月から5月上旬に合計10回の駆除を行い、1153尾のタイバラを駆除し、その後5月18日にヤリタナゴ45尾(15尾、30尾)を放して経過を見守った。

2013年6月中旬より10月までヤリタナゴとタイバラの稚魚の出現状況を追跡した。ヤリタナゴ稚魚は放流してから約50日後から出現し、742尾を確認した。しかし、タイバラの稚魚はこれを上回り、おなじ期間で800尾に達した。タイバラは4月から5月上旬に実施した駆除を逃れた個体が繁殖したものと推定される。

タイバラの稚魚は調査期間中の全ての回で出現し、産卵期は4~9月にまで継続していることが、推定された。最小成熟個体は全長30mm、体重0.4g程度で、早期に出現した稚魚は9月にはこの繁殖可能な大きさ(最小成熟サイズ)に達することが確認された。

ヤリタナゴ稚魚は6~7月のみに出現し、繁殖は5~6月と推定される。最小成熟個体は全長50mm、体重1.0g程度であり、タイバラと比較すると体重で2.5倍である。繁殖期に限られることから、次年の繁殖と推定される。

11月より再度タイバラ駆除を実施して1月までにタイバラを駆除(1404尾)した後、この生息地で繁殖したヤリタナゴを前回の10倍の450尾(257尾、193尾)放流した。今後、2014年春以降は、どのような状況になるのか、調査を続ける予定である。願わくば多くのヤリタナゴが発生して、下戸塚地区を補完できる第2の生息地として、マツカサガイとともに保全したいと考えている。

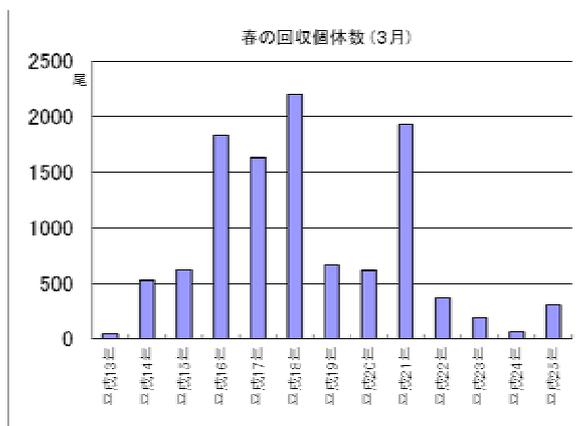


図3 ヤリタナゴの個体数の推移

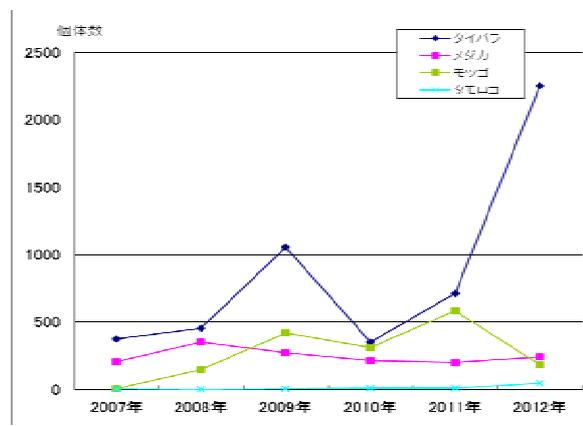


図4 H地区のタイバラの個体数の推移